



彗星の木星衝突を追って

渡部潤一著

誠文堂新光社, 175 頁, 定価 1200 円

解説書

お薦め度

☆☆☆☆

昨年の天文現象のうち、一般の人にとってもっとも関心と呼んだできごとは、シューメーカー・レビー第9彗星（以下SL9）が7月に木星へ、つぎつぎと衝突していった事件でしょう。本書の著者は、衝突することがはっきりした後、“巨大彗星が木星に衝突するとき”（誠文堂新光社，191頁）という解説書をあらわし、どのような現象がおこるかを予想しました。アマチュアにとっても、私のように専門外のプロにとっても、大そう興味深い考察がなされていて、暑い夏のページェントを期待させるものでした。一方プロとしての著者は、アマチュアの観測ネットワークづくりに努力するほか、岡山天体物理観測所の2台の望遠鏡を用いる観測計画に、精力的にとりくみました。その中心になるものは、山下卓也さんのグループが開発をすすめていた赤外線観測装置オアシスで、事実、関係者の努力で、SL9がこの装置の第1号成果として世に広く知れわたるようになりました。

本書は、研究者が与えられたテーマに対して、どのように考え、どのような装置を用意し、どのように観測日程を組んでゆくかを、日を追って記述していったルポルタージュです。このジャンルの作品はジャーナリストの得意とするところですが、当事者からみるとポイントを外れた描写や、思いこみがあって（それはそれでおもしろい一面もあるのですが）、研究者の生活、特に思想を正しく伝えていないことがよくあるのです。天文学を仕事にしている人が、実際に自らの行動を書くことの意味はこの点にあり、著者は十分成功しています。

SL9衝突の10日前には著者は過労からか、発熱でダウンしてしまいましたが、それもどうやら

乗りこえ、さわやかな7月17日を迎えます。電子メールをチェックすると「A核によるきのご雲の発生を赤外線で確認。その光度は衛星イオよりも明るい。」というカラアルト望遠鏡の報告でした。その後17日には、まだ衝突は始まっていないだろうとずっと以前の予報に基づいてひきうけた講演会にでかけ「間違っても、衝突を見ようと思って、展示されている望遠鏡を買わないように」といったりします。飛ぶようにして東京駅へかけつけて乗ったのぞみ11号車内で「ハッブル宇宙望遠鏡、SL9彗星の最初の核の衝突の撮影に成功。巨大なきのご雲を確認」という電光ニュースを目にします。鴨方駅から観測所へ向かうタクシーでは金星と木星を間違えたりもします。PI（主任研究者）がいなくても観測は順調に進むのが世の常ですが、著者の気持はよく分ります。

著者はあとがきで、「国立天文台、特に三鷹キャンパスは少なくとも現在ずいぶんと門戸を閉ざしているのではないだろうか。……宇宙にはこんなに素晴らしい現象がありますよ、こんなに素敵な世界もあるのですよ、といった感動を伝えたい」と書いていますが、この本は十分その目的にもかないました。

シューメーカー夫妻は、パロマーのリトル・アイ（5メートル望遠鏡ビッグ・アイに対抗して用いられる）を使って多くの小惑星と彗星をみつけることに科学の意味を見いだしているのですが、彼らの人生を知りたい読者は“ビッグ・アイ”（朝日新聞社、リチャード・プレストン著、野本陽代訳）第2章、シューメーカー彗星を読まれるようすすめます。

寿岳 潤（東海大・文明研）